

## 講演会A

### いっしょ読みの喜び

東京大学大学院教育学研究科教授 秋田喜代美 先生



学校図書館は一つの顔だけでなく、いろいろな場所とつながるきっかけとなるものであり、とても大切な場所となっていることや、大人側の言葉である「読み聞かせ」ではなく、「ともに読む」意味を包含している「いっしょ読み」という言葉のお話から講演がスタートした。○乳幼児期における絵本との出会いの重要性の一つは、読み手が変わること、本との出会いのバリエーションが変わること。読み手として、母親ばかりではなく、父親も大切な存在であり、多様な大人

が多様な関係を作り出すこと。

○絵本を一緒に見ることは、指導という関係ではなく、絵本の時間を分かちあう・ともにするということであり、20年後、30年後、本を分かちあうことのできる大人を育てていくこと。まなざしを一つのところに共同注視していき、赤ちゃんと保護者などのまわりの大人が笑顔になっていくことが大切であること。朝読書を監視するのではなく、いっしょになって見ていくこと。

○学校などで、お互いに本を紹介し合う活動の中で、ふせんを使った事例がある。ふせんには、十分に書けなくても、話すことができればいいのであり、友達に語る楽しさを味わわせてほしいこと。

この他、「おおかみと7ひきのやぎ」を例にとって、絵本の字のくばり、絵のタッチ、余韻のための工夫など、とても楽しいお話を伺うことができた。

## 講演会B

### 学校図書館は学校教育のインフラ～学校教育の改革を目指して～

八洲学園大学教授 高鷲忠美 先生



はじめに、読書が学力の面ばかりでなく生活面での基礎になっていること、読書力が国語力の育成につながっていること、読書は知的活動の基盤であるだけでなく、感性や情緒を育む基盤になっていることなど、「読書の大切さ」について話をされた。

次に、地域に公立図書館を作ったり、学校図書館の整備をしたりすることは大切ではあるが、それだけでは不十分であり、もっと学校の授業に生かしていかなければならないということを熱く語られた。また、学校図書館を学校教育の中でどう位置づけ、どう使えばいいのかということを、先進校の例を挙げて説明をされた。その上で島根県の松江市立揖屋小学校や大田市内の各学校の取組を称賛された。

最後に、先生が学ばれた大田市立富山小学校で行われた研究授業に招かれたときの様子を話された。図書館を活用し、読書、調べ学習にしっかり取り組まれており、図書館活用教育が根付いてきていることを喜んでおられた。そして、「島根県の図書館活用教育に期待している」という言葉で講演を締めくくられた。

## 講演会C

### 島根の子どもたちに自ら学ぶ力を ～学校図書館で育む情報活用能力～

青山学院女子短期大学教授 堀川照代 先生



今求められている力（新しい学力）の育成のために学校図書館が力を発揮できるという考えは90年代から始まっているという話から始められた。続いて、学校図書館の働きが時代を追って利用指導から情報リテラシー育成、プロセスの学習へと変化していること、「Big6 スキルモデル」や「探究モデル」といった情報活用プロセスモデルが研究されていること、情報活用プロセスの指導において大切なこと（年少時；「思い出す・要約する・言い換える・広がる」ような質問、高校生まで；6つの「C」

Collaborating, Conversing, Continuing, Choosing, Charting, Composing）を紹介された。そして、学校図書館の読書センター機能、学習・情報センター機能を活用して子どもたちの思考力・判断力・分析力・表現力を高め、読書力・国語力、情報リテラシーを育成するとともに学ぶ意欲を育てることが大切であることを強調された。

最後に東京都内2区の実践事例を紹介され、「島根県としての取組が市町村レベルで盛り上がっていくことを願っています。」という言葉でしめくられた。

## 講演会D

### 個に寄り添い育てる図書館活用教育～問題意識醸成支援を考える～

帝京大学 文学部教育学科准教授 鎌田和宏 先生



現代社会は、知識基盤社会であり、高度情報化社会である。新学習指導要領時代の教育は、国語や算数の反復練習や基礎・基本の学習だけでは十分でなく、言語力を基礎とした知識の活用・探究が大切である。これらを育むには各教科等で図書館を活用することが有効であり、学習・情報センター機能としての図書館は教育課程を支えるものとなる。図書館を活用した授業を行っている学校の子どもや読書に親しんでいる子どもの学力は高い。図書館

には探究を楽しんだりエネルギーに変える力がある。

探求的な学びにおいて子どもに作文を書かせるときには、ノルマと思わせないように、興味をもって書くことを書かせることが大切である。また、子どもが表現したら、次の一歩が踏み出せるようなコメントで探究の支援をしたい。探究のテーマの基礎となる問題意識は「教える」よりも「育てる」、「育てる」よりも「醸成する」という感覚が大切である。醸成的指導の重点は情報や概念の可視化であり、可視化を可能にするスキル（情報カード、KJ法、ウェビング・コンセプトマップ、マインドマップ、マンドラート法、グラフィックオーガナイザー法等）の指導も必要である。

最後に、「可視化されたマップ等からの対話的な指導による問題の明確化と問題意識の醸成が大切である」「課題は一人で育たない。課題に育てる支援が必要である。」「個を知る指導者がよりよく支援できる」という言葉で講演をしめくられた。

## 講演会E

### 「学びを支える学校図書館 ～探求型学習と学び方指導～」

元川越市立南古谷小学校司書教諭 徳田悦子 先生



学校図書館は、教育課程の展開を支える資料センターの機能を発揮しつつ、「生徒自らが学ぶ学習・情報センターとしての機能」と「豊かな感性や情操をはぐくむ読書センターとしての機能」を発揮することが求められている。学校図書館の利活用については、学習指導要領の各教科等の内容の取扱いにおいても記述されており、課題設定し、情報の収集・整理・分析を行い、まとめ、発表する探究型学習において、最適な場であると考えられる。

そのような最適な場とするためには、「全教職員による学校図書館作り」「小・中学校の連携した指導形態」「学校図書館活用年間計画の作成」「資格と専門性を持つ司書教諭のリーダーシップ」「担任と司書教諭、そして学校司書の連携」「学び方の指導体系表の作成」などがあげられる。

子どもたちの思考力・判断力・表現力等の能力を育成するためには、司書教諭はもちろん、全職員による全教科での学校図書館の活用が求められ、探究型学習を支えるための学び方学習を体系的・計画的に継続していくことが大切である。

最後に、学び方指導の実践2例を紹介し、「学校図書館の改革は島根から、授業改革は島根から、教育改革は島根からです。子どもたちのために学校図書館を通してがんばっていきましょう。」という言葉で講演をしめくられた。